

かたわ者

有島武郎

青空文庫

昔^{むかし}トウロンというフランスのある町に、二人^{ふたり}のかたわ者がいま
した。一人^{ひとり}はめぐらで一人はちんばでした。この町はなかなか大
きな町で、ずいぶんたくさんのかたわ者がいましたけれども、こ
の二人のかたわ者だけは特別に人の目をひきました。なぜだとい
うと、ほかのかたわ者は自分の不運をなげいてなんとかしてなお
りたいたいおりたいと思ひ、人に見られるのをはずかしくて、あ
まり人目に立つような所にはすがたを現わしませんでしたが、そ
の二人のかたわ者だけは、ことさらに人の集まるような所にはきつ
とでしやばるので、かたわ者といえは、この二人だけがかたわ者
であるように人々は思うのでした。

いつたいをいうと、トウロンという町にはかたわ者といつては一人もいないはずなのです。その理由は、この町の守り本尊に聖マルティンというえらい聖者の木像があつて、それに願がんをかけるサンと、どんな病気でもかたわでもすぐなおつてしまうからでした。ところが私の今お話しするさわぎが起こつた年から五十年ほど前に、町のおもだつた人々が、その聖者の尊像をないしよで町から持ち出して、五、六里もはなれた所にある高い山の中にかくまつてしまったのです。なぜそんなことをしたかというと、ヨーロッパの北の方からおびただしい海かいぞく賊がやって来て、フランスのどこことなくあばれまわり、手あたりしだいに金銀財宝をうばつて行つてしまうので、もし聖者の尊像でもぬすまれるようなこと

があつたら、もったいないばかりか、町の名折れになるというので、だれも登ることのできないような険しい山のとつぺんにお移ししてしまったのです。

それからというもの、このトウロンの町もかたわ者ができるよ
うになつたのです。で、さつき私がお話した二人のかたわ者、
すなわち一人のめくらと一人のちんばとは、自分たちが不幸な人
間だということを悲しんで、人間なみになりたいと遠くからでも
聖者に願がんかけをしたらよさそうなものを、そうはしないで、自分
がかたわ者に生まれついたのをいいことにして、人の情けで遊ん
で飯を食おうという心を起こしました。

めくらの名まえをかりにジャンといい、ちんばの名まえをピエ

ールといっておきましよう。このジャンとピエールとは初めの間は市場いちばなどに行つて、あわれな声を出して自分のかたわを売りものにして一銭二銭の合ごうりき力を願つていましたが、人々があわれがつて親切をするのをいい事にしてだんだん増長しました。そしてめくらのジャンのほうは卜占者うらないしやになり、ちんばのピエールのほうは巡じゆんれい礼らいになりました。

ジャンは卜占者にふさわしいようなものしい学者めいた服ふ装くそうをし、目明めあきには見えないものが見え、目明めあきには考えられないものが考えられるとふれて回つて、聖サンマルティンのおるすをあずかる予言者だと自分からいいただきました。さらぬだに守り本尊が町にないので心細く思つていた人々は、始めのうちこそジャ

ンの広言こうげんをばかにしていましたが、そのいう事が一つ二つあつたりしてみると、なんだかたよりにしたい気持ちになつて、しだいしだいに信者がふえ、ジャンはしまいにはたいそうな金持ちになつて、町じゆう第一とも見えるような御殿ごてんを建ててそれに住まい、ぜいたくざんまいなくらしをするようになりましたが、その御殿もその中のいろいろなたから物も、聖サンマルティンの尊像がお山からお下りになつたら、一まとめにして献けんじょう上するのだといつていたものですから、だれもジャンのぜいたくざんまいをとがめ立てする人はありませんでした。そしてジャンはいつのまにか金かねの力で町のおもだった人を自分の手下てしたのようにしてしまい、おそろしくえらい人間だということになつてしまいました。そんな

るとお金はひとりでのようにジャンのふところを目がけて集まつて来ました。

ピエールはピエールで、ちがったしかたで金をためにかかりました。ピエールはジャンのようにえらいものらしくいばることをしないで、どこまでも正直でかわいそうなかたわ者らしく見せかけました。「私にはジャンのような神様から授かった不思議な力などはありません。あたりまえなけちな人間で、しかもいろいろな罪を犯しているのだから、神様がかたわになさったのも無理はありません。だから私は自分の罪ほろぼしに、何か自分を苦しめるようなことをして神様のおいかりをなだめなければなりません。この心持ちをあわれと思ってください」などと口ぐせのようにい

いました。そこでピエールの仕事というのは大きなふくろを作つて、それに町の人々が奉納ほうのうするお金や品物を入れて、ちんばを引き引き聖マルティンサンの尊像の安置してある険しい山に登ることでした。足の達者な人でも登れないような所に、このかたわ者が命がけで登るといふのですから、中には変だと思う人もありましたが、そういう人にはピエールはいつでも悲しげな顔をしてこう答えました。

「お疑いはごもつともです。けれどもいつか私の一心がどれほど強かつたかを皆様みなさまはごらんくださるでしょう。海賊がせめこんで来なくなるような時代が来て聖マルティンサン様が山からお下りになる時になったら、おむかいに行つた人たちは、尊像がどこにあ

るか知れないほど、町のかたがたの奉納品が尊像のまわりに積み上げてあるのを見ておどろきになるのでしょうか」

そのことばつきがいかにもたくみなで、しまいにはそれを疑う人がなくなつて、ピエールがお山に登る時が来たということになると、だれかれとなくいろいろめずらしいものや金かねめのかかるものをピエールのふくろの中に入れてやりました。

ピエールは山のふもとまでは行きましたが、ほんとうは一度も山に登ったことはありません。人々の奉納したものはみんな自分がぬすんでしまつて、知れないように思うままなぜいたくをしてくらしていました。

トウロンにはたくさんのかたわ者ができた中にも、二人のえら

いかたわ者がいる。一人は神様の心を知る予言者、一人は神様の忠義なしもべ、さすがにトウロンは聖マルティン^{サン}を守り本尊とおぐ町だけあると、他の町々までうわさされるようになりました。そうやっていっているうちに、海賊どもは商売がうまくいかないためか、だんだんと人数が減っていつて、めったにフランスまではせめ入って来なくなり、おかげでフランスの町々はまくらを高くして寝^ねることができるようになりました。

ここでトウロンでも年寄った人々がよりより相談して、長い間山の中にかくまっておいた尊像を町におむかえしようという事に決まりました。それにしてもその事がうっかり海賊のほうにでも聞こえれば、どんなさまたげをしないものでもないし、また一つ

にはいきなり町におむかえして不幸な人々に不意な喜びをさせようというので、二十人ほどの人がそつと夜中に山に登ることになりました。

そうとは知らないジャンとピエールは、かたわを売りものにしたばかりで、しこたまたくわえこんだお金を、湯水ゆみずのように使つてぜいたくざんまいをしていましたが、尊像が山からお下りになるその日も、朝からジャンの御殿のおくに陣取じんどつて、酒を飲んだり、おいしい物を食べたりして、思うままのことをしやべり散らしていました。

ジャンがいうには、

「こうしていればかたわも重ちようほう宝ほうなものだ。世の中のやつらは

知恵ちえがないからかたわになるとしよげこんでしまつて、丈夫じょうぶな人間、あたりまえな人間になりたがつているが、おれたちはそんなばかはやできないなあ」

ピエールのいうには、

「丈夫な人間、あたりまえの人間のことを見る。汗水あせみずたらして一日働いても、今日今日をやつと過あやごしているだけだが、おれたちはかたわなばかりで、なんにもしないで遊びながら、町の人たちがつくり上げたお金をかたつぱしからまき上げることができる。どうか死ぬまでちんばでいたいものだ」

「おれも人なみに目が見えるようになってなつちや大変だ。人なみになつたらおれにも何一つ仕事という仕事はできないのだから、その

日から乞食こじきになるよりほかはない。もう乞食のくらしはこりこりだ」

とジャンは相づちをうちました。

ところが戸外そとが急ににぎやかになって、町の中を狂気のように馳はせちがう人馬の足音が聞こえたと思うと、寺々のかねが勢いよく鳴りはじめました。町の人々は大きな声で賛美の歌をうたいはじめました。ジャンとピエールは朝から何がはじまったのかと思つて、まどをあけて往來を見ると、年寄りも子どもも男も女も皆戸外みなそとに飛び出して、町の門の方を見やりながら物待ち顔に、口々にさげんでいます。よく聞いてみると聖サンマルティンの尊像がやがて山から町におはいりになるといつているのです。

それを聞いた二人は胆きもがつぶれんばかりにおどろいてしまいました。

「奉納したものが山の上に積んであると、おれのいいふらしたうそはすっかり知れてしまった。おれはもう町の人たちに殺されるにきまつている」

とピエールが頭の毛をむしると、

「おれのこの御殿もたからも今日きょうから聖サンマルティンのものになってしまうのだ。おれの財産は今日からなんにもなくなるのだ。聖サンマルティンのちくしうめ」

とジャンはジャンで見えない目からくやし涙なみだを流します。

「でもおれは命まで取られそうなのだ」

とピエールがいうと、

「命を取られるのは、まだ一思いでいい。おれは一いち文もんなしになつて、皆にばかにされて、うえ死にをしなければならぬんだ。

五分ぎ切り、一いっすん寸だめしも同様だ。ああこまつたなあ、おまけに聖サンマルティンが町にはいれば、おれのかたわはなおるかもしれないのだ。かたわがなおつちや大変だ。おいピエール、おれを早くほかの町に連れ出してくれ」

とジャンはせかせかとピエールの方に手さぐりで近づきました。町の中はまるで祭日の晩のようににぎやかになり増さつてゆくばかりです。

「といて、おれはちんばだからとても早くは歩けない……ああ

こまったなあ。どうかいつまでもかたわでいたいものだがなあ。じやあジャン、おまえは私をおぶつてくれ。おまえはおれの足になつてくれ、おれはおまえの目になるから」

ピエールはこういいながらジャンにいきなりおぶさりました。そしてジャンにさしずをすると、ジャンはあぶない足どりながらピエールを背負^{せお}つていっさんに駆け出しました。

「ハレルーヤ　ハレルーヤ　ハレルーヤ」

という声がどよめきわたつて聞こえます。

ジャンとピエールとを除いた町じゆうの病人やかたわ者は人間なみになれるよろこびの日が来たので、有頂^{うちょうてん}天になつて、聖^{サン}マルティンのお着きを待ちうけています。

その間をジャンとピエールは人波にゆられながらにげようとし
ました。

そのうちにどうでしょう。ジャンの目はすこしずつあかるくな
って、あやめ綾目が見えるようになってきました。あれとおどろくまも
なくその背せなか中でさしずをしていたピエールはいきなりジャンの背
中から飛びおりるなり、足早にすたころと門の反対の方に歩きだ
しました。

ジャンはそれを見るとおどろいて、

「やいピエール、おまえの足はどうしたんだ」

といいますと、ピエールも始めて気がついたようにおどろいて、
ジャンを見かえりながら、

「といえはおまえは目が見えるようになったのか」

と不思議がります。二人は思わずかたずをのんでたがいの顔を見かわしました。

「大変だ」

と二人はいっしょにさけびました。たくさんの人々にとりこまれた古いサン聖マルティンの尊像がしずしずと近づいて来ていたのです。その御利益でごりやく二人の病気はもうなおり始めていたのです。

二人のかたわ者はかたわがなおりかけたと気がつく、ぺたんしりと地びたに尻もちをついてしまいました。そして二人は、

「とんでもないことになったなあ」

「情けないことになったなあ」

といひ合ひながら、一人は目をこすりながら、一人は足をさすりながら、おいおいといつて泣きだしました。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄」角川文庫、角川書店

1952（昭和27）年3月10日初版発行

1968（昭和43）年5月10日改版初版発行

1980（昭和55）年11月10日改版22版発行

初出：「良婦之友 創刊號」春陽堂

1922（大正11）年1月1日発行

入力：呑天

校正：きりんの手紙

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かたわ者

有島武郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>